

里地通信 1・2月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ：<http://member.nifty.ne.jp/satochi/>

連載：幹事紹介 里地での「学習と交流」の実践

宮崎暢俊（みやざき のぶとし）
熊本県小国町長

昨年私が住んでいる池鶴という集落で自然環境教育セミナーというバードウォッチングのイベントがありました。

池鶴の地名の由来は、多分小さな池があって鶴が飛来していたことによると思います。集落の中央には筑後川の上流杖立川が流れ、5 ha 程の耕地を中心にした集落です。中央には鎮守の森天満宮があり、境内は子供の頃の遊び場でもありました。缶けりや陣取りの場であり、社殿は探検の場所でもありました。また、近くには大岩石が積み重なった1 ha 程の雑木林があり、大木と巨大かずらと洞窟は、更にスリルに富んだ場所でした。少し上流で川は二つに分かれ、一方の支流を辿れば下城の滝を下から見上げることになります。

川遊びと山遊び、野草と野鳥の鑑賞、農作業体験など自然環境教育には絶好のフィールドと言えます。バードウォッチングに参加した近くの小学1年生は、それ以来野鳥のとりこになっています。誕生日のお祝いは、野鳥図鑑でした。

池鶴はまさに里地の集落です。しかし、昭和28年の大水害では、家屋は流出し、土砂崩れによる家屋の倒壊で人命をなくし、田畑は川原になってしまいました。その後の河川改修と護岸工事によって水害にあうことはなくなりました。しかし、魚を捕り泳いでいた淵はなくなり、堤防はコンクリートで固められました。人



と自然との共生を調整していくことはなかなか難しいことです。

小国町は、近代医学の父である北里柴三郎博士の出身地です。北里博士は、大正5年に生誕の地北里地区に図書館と貴賓館を中心とした記念公園を建設、町に寄贈しました。しかし、いつのまにか、それらの施設は休眠状態に、そして博士が町民に呼びかけた「学習と交流」を進めていくことも忘れ去られていました。「学習と交流」の活動は、里地にとって大変大切なことです。里地によみがえらせ、活力を持続させる原動

力だと思えます。小国町では、(財)学びやの里が博士の志を受け継いで「学習と交流」の活動を積極的に進めています。九州グリーンツーリズム大学を昨年の9月から、第2期生55名が学んでいます。本大学では、地域経営・景観形成・農産品加工・マーケティング・農家民泊運営などのカリキュラムを中心に講義と実習が行われています。

北里地区の中央を流れている北里川では、今、熊本県の事業により河川公園の整備が進められています。当初の計画では、野外ステージなど配置した都市的な公園整備でしたが、その後の地域の方々との話し合いで変更しました。北里公園は、自然石を使った水辺と小さな雑木林を中心に整備が進められています。まもなく子供たちの遊びの場になるでしょう。

略歴

昭和16年熊本県小国町に生まれる。昭和40年九州大学法学部卒。昭和46年から3期小国町議会議員。昭和58年から4期小国町長。地域の資源を生かし、活力と個性あふれるまちづくりを目指し、「悠木の里づくり」を提唱。小国町は古くからの林業地であり、その杉を使用した大型の木造公共施設を次々と建設。戦後、日本最大の木造屋根の町民体育館「小国ドーム」の建築工法「木造立体トラス構法」は1989年度、日本建築学会賞を受賞。また、その他、「町民プランニングシステム」「コミュニティプラン推進チーム」など、ハード、ソフトの総合的なまちづくりの推進は、昭和63年度「活力ある町づくり」の自治大臣表彰を受けるほか、地域づくりにおける様々な賞を受賞している。「コミュニティプラン推進チーム」を中心に策定した住民参加による「みんなで考え創るまちづくり条例」を平成8年10月施行。現在、全国で地域づくりに関する講演を行っている。平成6年秋に地域づくりの実践を書いた『とっばすの風』(七賢出版)を出版。平成7年度日本建築学会「文化賞」を受賞。

推薦図書

『とっばすの風～小さな国の大きな挑戦～』 宮崎暢俊(七賢出版)

里地ネットワークの幹事である熊本県小国町長が町での取組を著しています。

『ある夏の里地物語～マンガで見る環境白書～』 監修 環境庁企画調整局調査企画室

平成10年度環境白書で取り上げられた内容をよりわかりやすく、ストーリー性を持たせたマンガです。

『環境ジャパン1999～地球環境と日本の明日を読む～』 碓氷尊 グレン・パオレット編著

地球環境パートナーシッププラザ編集協力 ダイアモンド社

様々な問題が絡み合い複雑になっている地球環境問題を専門家によってわかりやすく説明させている本です。第1章の「時の話題」では里地に関する話題を竹田が執筆しています。

里地セミナー報告

里地づくりの試みから 21世紀の持続可能社会が

講師：内藤正明
京都大学 環境情報工学講座教授
日時：12月14日（月）
場所：リクルート銀座8ビル 会議室

はじめに

そもそも里地の意義は？ という話があったのは5年くらい前。その時はなぜ里地なの？ という時代がありました。

しかし、数年の間にその関心がみるみるうちに高まってきて、今はメジャー企業が取り組もうとしている。現実に日本中の里地でもいろんな試みが起こっています。現在は具体論やノウハウ、むしろそういうところを話す時代に入っているのではないのでしょうか。皆さんもそういうことを聴きたいと思っている人が多いのではないのでしょうか。

このようなノウハウ集はたくさんの方が書いています。また、全国では、里地で汗をかいてがんばっている人も沢山います。その人たちは、「こうやったら成功する/失敗する」ということをノウハウ集として書いています。これらはやはり現実的な話なので迫力があります。私も幾つかの地域に関わって勉強させていただいています。これらはそれぞれ特徴があって面白いです。今日はこれらの事例を一部参考にしますが、むしろなぜ里地なのかという歴史的な背景や意義を中心に、さらに何が問題なのか、についてできるだけ一般化した形で展開していきたいと思います。

里地を注目するようになった背景

20世紀の末に世の中全体がおかしくなっているのではないのでしょうか。地球環境問題は深刻な世界規模の問題になっているし、日本国内でもいろんな問題が出て、行き詰まっています。これらは同じようなと

ころから来ていて、この根元は何か、ということです。いろんなことが一見独立して起こっているように見え



ますが、いろんな問題の中で結局すべてが絡み合っていて、連動して一体になっていることです。そしてその根源的なものが存在していて、それがいま一気に吹き出している、ということだと思われます。

「どれだけ深刻か？」ということですが、間違いなく2000年台の早い時期に破局が来るという予測があります。もちろんハッキリしている訳ではありませんが、専門家のいろんな人の意見を聞いても、それらの予測はそれ程かけ離れていないと言うのは、恐ろしいことです。

では、そのような破局にどう堪えるかということですが、つまり持続シナリオをどう描くか...ですが、結局どう模索しても救いは里地ではないか、というのが、里地ネットワークの意味だと思います。では日本だけで里地をどうにかすればいいのか、地球全体として大

丈夫なのか、という話しになります。

京都で1週間前COP3から1年ということでパネルディスカッションが環境庁と京都府によって開催されました。これは、まさに脱温暖化社会とは何か、これからどうつくるか、という話でした。私が結論として言ったことは、脱温暖化社会というのは、里地でイメージしているところをとりあえず日本につくる、それが途上国に伝わるのが一番の道であって、大規模技術を日本から輸出して、世界が助かるということはないだろう、ということです。

地球環境問題と資源の問題が食糧につながっていきます。食糧は人間生活にとって一番の深刻な問題です。これを考えても、今のように都市に寄りかかっているのは危ないのではないかと、思います。

今日、国内的にも世界的にも様々の危機に直面している原因は、いうまでもなく歴史の中にあります。その歴史スケールは文明史、産業史、戦後史など様々です。

日本でいえば、一番身近な戦後50年の影響が最も強いのは言うまでもありません。戦争に負けて無一文になってから「こういう風になろう」とがんばってやってきた戦後の経済復興、この手段が工業化と都市化そして人・物・金の集中と中央集権化、すべて東京に集めようということでありました。

都市と里地の格差

この時代の工業化によって、規格大量生産を生み、それによって稼ごうというのは戦後一貫していまだにほとんど崩れていなくて、実はそれが、最大の問題の一つになっていると思います。

この工業化は明らかに成果をもたらしました。戦後から20年くらい前まではこれが大変効果的であったが、どこかでその副作用があらわれてきました。結局、すごく良く効く薬を飲んで良くなったためもっと飲めば良くなる、ということではなかったのです。で、副作用がどんどん大きくなっているにも関わらず、まだこの薬をから逃れられない日本の状況が病状をますます悪化させていると思います。

これが一人の人間であつたら、元気も副作用も自分ももらうだけなのですが、社会の問題は元気になるプラスの人と、副作用を受けるマイナスの人が社会的に分かれていることです。一部のプラスのみを受け取る

人は副作用をあんまり感じないから、改めようとしにくいのだと思います。

これまで、この副作用を受けてきたのは里地であり、元気になっていくのは都市、という構造なのです。

これが都市化です。プラスとマイナスの格差ができてきている。更にこれから高齢化などの問題が重なってきたときどうしたらいいのでしょうか。

今後の社会像についていま日本の議論は大きく2つに分かれていると思います。これを私はテクノセントリズムとエコセントリズムと呼んでいます。

前者はCOP3の議論で打ち出された、原子力発電や技術改善、リサイクル産業などで、これらはハードの技術から抜けきれない発想です。新しい技術や今の技術をもう少し高度にすればよい、という考えが抜けきれしていません。

この考えは、今までおいしい汁を吸ってきた人には損にならない仕組みになっています。一方で里地に象徴されるような副作用をかぶってきた人はますます悪い状況になっていきます。これで本当に今日の問題が全体として本気で解決することはあり得ないと思います。

新しいシナリオ

それに代る新しいシナリオとして、エコセントリズムはこれまでの都市型/大量生産型の技術システムを大きく変えなければならない、というものです。それはエコ産業革命なんてのも含まれますけれど、そこから始めなければならない。もっと言えば脱工業社会からすべてお金で計算する市場論理はおかしいのではないかと、という議論もあります。市場の失敗を本気で反省するならノン・マーケットなメカニズム社会、温暖化を心配するなら脱石油文明、ということも考えなければならぬと思います。

私は数年前に東京から離れて京都に行きまして、周辺でお手伝いを始めましたら地方では「何を言ってもいいんだな」と思うようになりました。各地方でなら、「私の町ではこういうことがしたいんだ。町民もそうしようって言っているんですよ」となつたら、「じゃ、やっちゃいましょう」と言って、林業とバイオマス、自然エネルギーで徹底して村おこし、そう言ったお手伝いをできるんですね。

村や町レベルではできるこのようなことが、国では

できません。複雑な利害がありすぎます。そのようなことから、「国レベルでは技術中心で勝手にやってください」と言っています。一方で、各地方のまさに里地と呼ばれるところにいるんなパターンを試みていただいたいと思います。

生物は生き延びるためにいろんな遺伝子を残そうと考えます。特に状況が弱くなったときは、遺伝子を多様に作り出して、そのうちどれかが生き残ってくれるのではないか、ということを目指して子孫を残します。ですから日本もそういうことで里地毎にそれぞれに合った多様な試みをやっていただいたいだろうと思います。そして、21世紀に大きな激動が来て、その内のどれが生き残るか、という可能性が見えてくでしょう。だからそれまでいろいろトライをしておかないといけないと思います。それまで国をあげての原子力だけでやっている、ひょっとしたら破局があるかもしれません。

C O P 3 での議論

これが里地とどう関係があるのかをもう少し踏み込んでみましょう。

世界中が誰も観たことのない二酸化炭素にあれだけ大騒ぎをしました。問題は何かというと、やはり現在の経済システムをそのまま延長し、つまり経済成長しながら何とか問題に対応しようというアメリカや日本など先進国政府の方針にあるということです。

そんなことをしていたら温暖化の解決にまったくつながらないと、20%削減を提案しているNGO、IPCCは60%の早期削減、エコスペースは一人当たり1.97トン(今の9.1トンの5分の1)の年間放出量という議論があります。ヨーロッパを中心に行っているファクター4は1/4削減は不可能ではないと言っています。現に、そのための具体的な議論が起っています。ヨーロッパが本当にこれに踏み切ったならば、ヨーロッパとアメリカや日本の社会は違った方向に進んでいくでしょう。

これは、先ほど言ったテクノセントリズムとエコセントリズムという技術中心の社会とエコ中心の社会とにほぼ対応すると言っているといいでしょう。

このように、すでに分かれ目が見えつつあります。そこで里地がいま一生懸命努力しているのは、ほとんどがこのヨーロッパの方向性を参考にしていこうとい

う方向に見えます。ただし、これは今の日本の国の体制とは相容れないかもしれません。

カレンバックのエコトピア

これはとんでもないSF小説のように見えますが、非常に象徴的であります。証明はできないが彼は自分の感性としてこういう風になるだろうと言っています。これはカリフォルニア周辺の3州が国交を断絶して創るという世界を描いています。つまり環境共生社会づくりには今のアメリカと独立戦争をしなくては達成できない。

彼は、本気で生き残る努力をするのなら、アメリカと独立戦争をしなければならないのではないかと考えている。これは大学のテキストなどにも使われています。

要するに今の日本やアメリカの社会構造の中では彼が考えているような社会システムは実現しないのではないのか、ということです。

日本での環境施策

私は工学出身ですが、何でも技術で解決するということに限界を感じます。同様なのが工学出身のマンガを描く高月教授です。プラスチックからコップ1杯の油を再生するのにドラム缶1缶の石油を使って大きな装置を動かしてリサイクルをする、というマンガを描いています。こんなことは工学をやっている人には実は当たり前のことで、工学をやっていない人は「すごい画期的な装置だ」という風に思うかもしれません。これで石油問題が解決する、と思ってしまうのは大変恐いことです。

日本では戦略と言いましょか、例えば温暖化対策という大きな項目がありましたら、それに対して階層構造があります。そしてその構造の末端に、個別の改善技術があります。

本当はその末端の技術よりもっと上の段階の、戦略にあたる部分をちゃんと評価しなければならないと思うのですが、日本の場合は技術中心です。技術とか施設とか、そういうものをひとつくっつけばエコロジカルな試みになるのではないか、という風に考えがちです。

ヨーロッパの環境共生都市といわれているところは

もうちょっとトータルに見ているのではないかと思います。「技術をただひたすら積み上げていって持続型の社会ができるのか？」と日本では本気に問うていないようです。

ゼロエミッション

これは本気で考えたら非常に難しい言葉ではあるが、企業でも、地域づくりでもはやっていて盛んに使われています。定義は、ある対象システムから排出されるすべての形態の廃物が限りなくゼロに近いということですが、対象からあらゆる環境負荷を出さないということから、どうしても自己完結、つまり「自立圏」という概念が出てきます。

現在、ゼロエミッションは生産系、とか、生活系、とか、地域社会とかあらゆる対象に使われています。これらは境界をはっきりと決めないと、そこから出ていくものの量も測れないし中身もはっきりと見えません。二酸化炭素、水、廃棄物、熱...そういった物を全部ゼロに近づけるというものですが、これは本当にできるのかというと、理屈の上ではできないことです。今のところ、どこまでゼロに近づけるか、ということです。

要するに出さないために何をすればいいんだろう、循環ですか、自然エネルギーですか、それとも...と言うのが非常に重要なところですよ。

廃棄物の堆肥化

有機系の廃棄物はとにかく循環する。つまり堆肥にして作物を作る、という試みがあります。

これはいいことなんです、これを本気でやったときの問題は、堆肥化した堆肥が余って困るということです。ゴミが余ったので堆肥を作れ、という堆肥があふれかえってしまう。余った堆肥をたくさん投入すると今度は畑が壊れる。必ずどっかが崩壊する。

これは日本で考えれば当たり前のことです。なぜかという、今の日本は、大量の食料・飼料・肥料を国外から持ち込み投入し、消費し、その上でここに循環系をつくらうとしています。これでうまくいくのでしょうか。

一番いいのは国外から持ってきたら、それに見合う廃棄物を元の国外に持って行って、はじめて循環が閉じるのです。しかし、それはどうも難しい。廃棄物の

まま運ぶことができないからといって、堆肥化したものを国外に運ぶのもコストやエネルギーがかかりすぎていて無理です。外から大量に持ち込まれている、これが今問題となっている。仕方がないからエネルギーにするか、減量化する。そのためにそういった技術を考えなければならぬ、それができなければ輸出するしかない、ということによりやく気がつき始めました。ですから国内での循環だけではだめです。トータルバランスを考えなければいけません。

しかし、これらは為替相場と穀物レートで自動的に決まってしまうので我々はどう逆立ちしてもどうにもできません。ここが実は循環型社会にいかない最大の原因なのです。これがさっきのグローバリゼーションに引っかけられてきて、さらに日本の輸出構造につながっていきます。日本の工業製品の輸出を抑えないと...、という話しに行き着きます。たった1%落ちただけで不況だ、と大騒ぎする日本で、「工業製品の輸出を抑えて一次産品の輸入を抑える」ということを言えない限り循環は難しいし、そして里地に目をむけるのも難しいことです。

ところが韓国は、農業はIMF騒ぎなどでピンチになり、節約型農業、つまり循環型農業に戻ろうとしている。はっきりしているのは、日本もこんなことが起こったら、一気に循環型の生活に戻るのでしょう。

しかし、今の日本の消費レベルで自給をしようと思つと明らかに土地が足りない。今のレベルで家畜の餌になる資料を作つていこうと思つと、ほとんどが家畜の牧草地になってしまう。では食事を1955年レベルに下げてみたらどうなるんだろうか、とシミュレーションをしてみると、基本的にはかなり自立型でやっていくということがわかってきました。

理想の循環型社会

江戸時代は、自然と人間の循環が成立していました。鳥や緑もその循環の環に入っていて、人間はそれの一部と言うパターンです。

しかし、江戸に戻れ、とは言えません。これには賛否両論があります。

「2005年は江戸時代」(作者：石川英輔)という本が売られています。これはすごく面白い。里地に関心のある方はぜひ読んでみてほしいです。SFではありますが、筆者は江戸のあらゆるデータを把握してい

る。それで、「基本的には江戸時代の状況の中で、現代人の知恵と技術をうまく使って、新たな豊かさの社会が出来る」ということを描いてみせています。

自立型都市モデル

有名な一例はカリフォルニアのビレッジホームズです。ここでは、コミュニティー自身をきちんと再生するという意識をしています。全体では果樹園などを共有してみんなで作って収穫して収入があったらそれを使ってコミュニティーケアをしていきましょう、などという考え方であります。エネルギーとか地球に負荷をかけないということと同時に、それが実現することの大きな要素としての共生があります。共生というと緑や鳥と共生する、というようになりがちですが、人と人との共生が大きな要素ではないかと私は思います。

地球デザインスクール

京都府は丹後半島で当初、大規模なリゾートを作ろうと思ったが、バブルが崩壊して、計画が流れ、どうしようか、というところから始まったところです。

動機は不純だけれど志はいい、ということで私も少しだけ協力しています。イギリスのキャットを越える日本で初めての試みということで期待しています。いろんな研究者や若い人が手弁当で集まって、蛇にビックリしたりしながらけなげにいろんな試みをしてがんばっています。

これからは地域でこういう新しいテクノロジーや生活の仕方、ひいては社会のあり方の学習センターが広がっていけばすばらしいのではないのでしょうか。

現代の社会

このごろの若い人や子供は、自分の意志がボタンを押すだけで通じて行えるという考えになってきているように思います。自分の思うままに何でもなるというカプセル型社会の考え方をしているようです。

ところが農業をやっている子供を教える機会があるのですが、彼らは人間の力ではどうすることのできない自然の力を知っています。そういう力にはとにかく耐えなければいけない、皆と力を合わせ、かつ自然と一緒に生きていかなければいけないということ

が体感としてわかっています。

この様な子供と、技術の中で生きてきた子供の人間性や自然観・社会観の違いは顕著に表れています。カプセル社会なんて社会ではない。しかし今の若い人の反応がきわめてこの社会に近いのではないのでしょうか。この面にも里地の意義は大きいと思います。

環境白書について

今年の環境白書には、地域づくりのあり方なども描かれています。

ここではひとつの流域とか、生態圏、生活経済圏と言っています。このような圏域を自立的なひとつのユニットとして再生させなければいけないということは非常に大事なことであります。つまり自立的なひとつの圏域をこれから想定していこう、という提案です。これは今の世の中の流れである世界中がひとつのマーケットにしようというグローバリゼーションとは反しているかもしれません。

この圏域（この区域の分け方は難しいけれど）をイメージしながらユニット化していった方がいいのではないのでしょうか。そうすることによって人の交流やものの循環、自然エネルギー、エコ技術だとか生き物や人と人との共生だとかそういうことが実現できるのだ、ということです。

私は環境に関してはグローバリゼーションはマイナスであることははっきりしていると思います。私たちは、このグローバリゼーションが次にどんな事態をもたらすかを知っておかなければいけません。これは一言で言えば、ほんの一握りのメジャーが世界マーケットを握ることをお膳立てするということです。

里地で皆がそれぞれ技術的に多様性を生み出しながら豊かになる、ということとはまったく違うことです。

また、今年の白書には、荏原、長井市、酪農王国、鎌倉市などいろんなパターンの事例が紹介されています。そしてここには、連携という言葉キーワードにいろんなことを整理しています。

自然のメカニズムの連携

物質循環の連携

人々の連携（人と人との共生も含む）

業（系）としての連携

機能の連携

という特徴ををあげています。

こういう言葉からも新しい地域づくりの方向として里地の重要性が強く示唆されているのではないのでしょうか。

さいごに

都市づくりの歴史を振り返ってみると、ぴかぴかの技術中心の流れと、技術では人間の豊かさは創れないという環境共生型の流れと2つあって、環境共生型の流れが今いるんな所で広がりつつあるのではないかと、ということです。

こういうひとつの流れが集大成して、どういった環境調和型都市、地域、里地になるのか、歴史的に見直す時に来ているのではないかと、思います。

評価尺度でいえばそれは「エコノミー」と「アメニティー」と「エコロジー」、と3つをどううまくバランスさせるかということではないでしょうか。

それは結局住んでいる人が主人公になり合意形成を図っていく。その結果、テクノポリスになるのか、エコトピアになるのか...それはこの3つの尺度の評価に立って、どういうパターンが一番自分達にとってふさわしいのか、どういった社会にこれから暮らしたいのか、ということだと思います。

京都大学大学院工学研究科環境地球工学専攻 内藤正明
NAITO Masaaki Kyoto-Univ JAPAN
E-mail: naito@eie.gee.kyoto-u.ac.jp

イベント・募集案内

里山インタープリターズキャンプ

「湿地の再生プログラム」

第2回里山インタープリターズキャンプは、専門性を持ったゲストを招いて愛知県豊田市のエコの森で年3回行われるプログラムです。今回のゲストは全国雑木林会議世話人の中川重年氏です。また、参加者の方々とネットワークを深めることもできます。

日時：2月26日（金）～28日（日）

場所：愛知県豊田市

参加費：20,000円（プログラム・ホテル宿泊・食事込）

募集人数：30名

問合せ：エコのもりセミナー事務局（鈴木・山崎）

電話 03-3475-7738 FAX 03-3475-7735

森遊び倶楽部

「『やまんば』と森で遊ぼう」

やまんばこと近藤加寿子さん（環境共育事務所オフィス・キウイ）が森を舞台にストーリー性のあるウォー

ラリーを展開します。

日時：3月14日（日）

場所：愛知県豊田市

参加費：無料

募集人数：30名（小学5～6年のみ）

問合せ先：左記と同じ（エコのもりセミナー事務局）

環境白書表紙絵コンクール

毎年政府が環境の現状と環境の保全に関する施策を公表している環境白書。この白書の平成11年度表紙絵を公募します。これにより、国民の環境保全意識を高めることを目的としています。また、環境月間普及啓発用ポスター等にも使用する予定です。応募資格は小・中学生の部、一般の部、と2部門あります。

テーマ：21世紀の環境にやさしい社会・21世紀の環境に配慮した豊かなライフスタイル・明るい環境保全型社会のモデル・等

応募締切：2月末日（審査は主催者において決定）

要項等詳しい問合せ先：（財）日本環境協会

電話03-3508-2651

里地シンポジウムのご案内

里地ネットワークでは、2月は各地域でシンポジウムを開催します。地域固有の文化や風土を体験するプログラムもたくさん組んでいますので、遠いいななどとおっしゃらずに、ぜひともお越しください。

北海道標茶町、秋田県二ツ井町のお申し込みは事務局までご連絡ください。

里地ネットワーク設立1周年総会は、通信最終ページの申込書でお申し込みください。

新田園生活のすすめは、前号の通信同封の申込用紙で国際航業(株)ライフクリエイト部シンポジウム事務局まで申し込むか、「チケットぴあ」にてご購入してください。

北海道シンポジウム「地域はどうすれば活性化するか」

日時：平成11年2月5日(金)～7日(日)

場所：北海道標茶町

里地ネットワーク事務局では、昨年1年間、さまざまな地域の人々に会い、地域づくり、地域活性化の試みに接してきました。この中で、特にネットワークとして相互に学び合い交流を行なうべきではないかと考えた地域があります。

公民館制度をひかず独自の地域振興会を継続し今日のコミュニティープランによる地域づくりを行なう「熊本県小国町」

戦後すぐに公民館制度を独自の自治公民館制度に改定し地域計画を進めている「宮崎県諸塚村」昭和初期の開拓酪農と10余年前の集落再編の際に地区計画を推進した「北海道標茶町」

13年前にたった2人で始まった地域活性化運動(CCPPT:智頭町活性化プロジェクト集団)から始まる「日本1/0村おこし運動」と「ひまわりシステムのまちづくり」を推進する「鳥取県智頭町」

それぞれ固有の自治意識と地域リーダー、そして、外部支援者たちによる地域づくりの試みは、社会システムの観点から、また、自治の形成過程、課題、障害、解決に向けたさまざまな試みへの挑戦の足跡そのものであると思います。開催地は、釧路湿原と阿寒国立公園を南北にもつ北海道標茶町です。道東の白銀の地で、これからの地域づくりについて語り合いませんか。初

日は、釧路湿原に面した「憩の家かや沼」で、スライドなどの映写と懇親会的な交流の場を持ちたいと考えています。

プログラム

2月5日(金) 標茶の紹介と交流会

- 16:30 集合
- 17:00 標茶のスライド「四季の標茶」上映
参加者の自己紹介
- 18:30 交流会

2月6日(土) シンポジウム

- 10:00 開会趣旨：里地ネットワーク
- 10:10 開会挨拶：標茶町長
- 10:20 小国町 宮崎町長、木魂館 江藤館長より報告
- 11:50 宮崎県 諸塚村より報告
- 12:30 休憩、昼食(お弁当)
- 13:30 鳥取県智頭町より報告
- 14:45 標茶町 虹別、塘路、阿歴内、栄、久著路地区他より報告
- 16:00 さまざまな町の話聞いて、一言コメントを
- 17:30 交流会

2月7日(日) 標茶町視察

午前中で終了予定、当日の天候により実施できない場合もあります。

- A：湿原の周辺散策
 - B：犬ゾリ体験
 - C：乗馬体験
 - D：オオカミの目から見た環境教育
- 宿泊：憩の家かや沼(標茶町内・2日間とも)

里地ネットワーク設立1周年総会

日時：2月13日（土）10：00～12：00

場所：東京国際フォーラム 会議室

参加費：無料

設立1周年総会では、1998年の主要活動内容の報告を行います。

この概要は以下のようなものです。

集落単位での住民参加による地域計画づくり

（愛知県美浜町）

町村での住民参加の地域計画と住民自治

（標茶町、小国町、智頭町、諸塚村）

環境先進地での、環境政策、総合計画、生活文化と産品開発（熊本県水俣市）

都市生活から田園生活へのシフトシナリオ

（国際航業株式会社、茨城県八郷町）

宮沢賢治の町づくり「農民芸術概論」「石っ子賢ちゃん」の暮らしと商品開発研究（岩手県東山町）

山林地において生活の核となる家を通して、これからの木材住宅振興を考える（秋田県二ツ井町）

地域における実践活動を通じた個別支援を行いながら以上のような調査研究を行いました。また、各地での実践を行うための基礎概念として、さまざまな理念や技法の研究やセミナーをあわせて行うことにより、科学的な検証や社会システムとしての把握を行えるようにつとめてきました。これらの活動を通して、

・環境保全型里地の実践範囲は、モンスーンアジア

の稲作文化が行われる地域を対象とすることが、風土の共通性から可能ではないかという考え方

- ・日本の民族文化のなかには、西欧文明に学んだ近代化、高度経済成長期に、軽視されていたが非常に重要な生活文化が蓄積されており、その文化の伝承が早急に求められていること
- ・環境保全型技術は、さまざまな技術がこれから開発されていくが、特に、河川土木や治山においては、伝統技術の中にさまざまな自然と共生する技術が含まれておりこの技術の仕組の解明が必要であり、自然と共生する技術は、伝承技術を重視すべきこと
- ・地域の活性化は、まず、地域住民が地域の歴史、文化、自然資源、生活文化を知ることから始めることで、住民自身による地域のあり方を協議し、住民による地域づくり、地域計画を作成していくことで、地域固有の風土、自然生態系、地場産業（風土産業）が活性化し、人と人、人と自然の共生する社会が営めるのではないか
- ・21世紀の持続型社会は、地産地消を前提とし、生産型自給型の地域内循環型社会が求められている。この実現モデルを、里地で創造し、検証していくことが必要という認識に至りました。

以上のような報告を行わせていただきたいと思いますので、ぜひお越しいただきますようお願い申し上げます。

「新田園生活のすすめ」21世紀のライフスタイルを語ろう

日時：2月13日(土) 13:00～16:15
場所：東京国際フォーラムホール C
参加費：2000円(チケットぴあにて発売)

里地ネットワークでは、法人会員である国際航業株式会社とともに、定年後の農的生活、特に、40歳後半から60歳の方々を想定した(もちろん若年者でもよいのですが)定年後のライフステージと、里地の活性化という視点から「農的な生活を楽しみ、里地の地域文化に寄与する」ライフスタイルの方策について検討してまいりました。この方向に関するひとつの具体案として、以下のシンポジウムを開催し、都市から里地への新たなる仕組みづくりを行ないたいと考えています。

開催趣旨

あふれ出る情報と大量生産、大量消費に覆われた社会には、社会の第一線で夢中で働きつづけてきた人々が暮らしています。企業社会、経済生活を核とした社会、縦割社会、画一的な教育の中にいる青少年、このような社会の中で人々が、自らの生き方、都市生活のあり方を、ふと振り替える時、自分にとって、そして、家族にとって、都市生活というものは、最良の選択であるといえましょうか。

人々が自然と調和しながら暮らせる場所、そして心豊かに生活できる場所こそが、心のふるさとであり、暮らし方ではないかと考えることもできます。21世紀にむけた暮らしとは何か、心の豊かさを求めて自然に触れ、自然の中で、さまざまな生き物たちや、土と太陽と豊かな水、そして、みずから育てた野菜や花たちとの語らいのある暮らしについて語り合い、都市生活から新田園生活へと、どのようにシフトするか、その実

践者からの報告を受け、茨城県八郷町への生活の転換、生活のシフトプログラムを紹介します。極端に集中した日本の都市生活から、欧州におけるような分散型社会、田園生活への緩やかなシフトプログラムが、拡大することを目指しています。

主催：里地ネットワーク、国際航業株式会社
後援：株式会社パソナ、株式会社法研、ライフプラン倶楽部、「田舎暮らしの本」宝島社、八郷町農業協同組合、やさと生産組合

内容：

基調講演： 京都大学 内藤正明教授

「自然循環型社会システムとは...」(案)

講演： 女優、農政ジャーナリスト 浜美枝

「15年の田舎暮らしからの思うこと」(案)

特別公演： 社会風刺コント、THE NEWSPAPER

「都市生活と田園生活」(案)

抽選会： 有機野菜産地直送品

パネルディスカッション：

失敗しないで田舎暮らしを始める方法

司会：竹田純一(里地ネットワーク 事務局長)

パネラー：

浜美枝(女性の実践者代表)

合田寅彦(男性実践者の代表)

竹越秀和、愛子夫妻(夫婦実践者の代表)

佐藤信弘(マスコミ代表：田舎暮らしの本編集長)

大山充(田舎暮らし事業のしかけ人)

また、このシンポジウム運営のお手伝いをしていただける方を募集しています(謝金・昼食あり)御希望の方は事務局までご連絡ください。

森の学校・森と木材を活かした町づくりのシンポジウム

日時：2月25日（木）～27日（土）

場所：秋田県二ツ井町

二ツ井町では、1986年夏より年4回、四季を通じた季節感のあるプログラムを設けて森の学校を実施してきました。この内容を更に深めるためのシンポジウムと森の学校を以下の通り開催いたします。

日程概要

25日（木） オプション：自由散策コース

9:00～七蔵山散策コース、二ツ井の住まい発見コース

26日（金） 森の学校

9:00～15:00 開校式の後、山仕事

17:00～20:00 交流会（会場：杉ホール、宿泊も同じ）

27日（土） シンポジウム

10:30～13:00

基調報告：「住まうということ、風土と木、土、糸」

今井俊博

スライド上映：「二ツ井の住まいと木について」 鈴木

外からの報告：「外から見た二ツ井の文化と生活」

木村哲雄

学校参加報告：「二ツ井の家を建てて...」

二ツ井の生活者から：「二ツ井の家を調べたら...」

詳細は、里地ネットワーク事務局へお問い合わせください。

事務局日記 98年12月

12月25日～26日、1月11～12日

岩手県東山町訪問

宮沢賢治が晩年3年を、東北砕石工場の技師として働いていた岩手県東山町では、賢治の考え方を未来へとつなげる「グスコブドリの町づくり」を行っています。賢治の働いていた砕石工場を近代化遺産に登録し現況で展示を行うとともに、賢治の取り組みを紹介する展示室、交流施設が、昨年11月完成しました。

これからは、宮沢賢治が著した「農民芸術概論」や石の研究家としての石っこ賢さんの考えを実践する、農村振興と石の産品開発を中心に町づくりのお手伝いをしていきたいと、里地ネットワーク事務局では考えています。石の商品開発は、現代の石っこ賢さんといわれている和光大学の関根秀樹さんのお力をお借りしています。

1月は、2月のシンポジウム準備や、昨年のお美浜、水俣の報告書作成、原稿書きに追われています。2月に、北海道、東京、秋田のいずれかで、皆さんにお会いできるのを楽しみにしています。詳細は、その折りに。（竹田）

12月26日

秋田県二ツ井町

森の学校を3年前から実践している秋田県二ツ井町で、来月2月25日から27日まで、森の学校と森の町づくりシンポジウム（仮称）を開催します。二ツ井町には、モクネット事業連合という組織があり、ここでは、10数年前から、青森ヒバと秋田杉の乾燥材を使った軸組み工法の家づくりを行っています。塗料や壁紙などの自然素材のネットワーク、棟梁、設計士、工務店の強力なネットワークがあります。東京近郊でも、何十棟もの家が建築されています。国産材、乾燥材、天然素材、軸組み工法という伝統的な家づくりにご感心のある方は、森の学校に参加して、森と人と生活文化のことを語り合いませんか。